「ゲバルト」展　PRESS RELEASE

2024/04/21

展覧会概要

会場	東京日仏学院｜〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町 15 CAVE-AYUMI GALLERY｜〒162-0805 東京都新宿区矢来町 114 高橋ビル B2 セッションハウス 2F ギャラリー｜〒162-0805 東京都新宿区矢来町 158
会期	2024 年 5 月 18 日 – 6 月 16 日
開廊時間	東京日仏学院 火～木：9:30～19:30　金、日：9:30～17:00　土：9:30～19:00 CAVE-AYUMI GALLERY 12:00～19:00 セッションハウス 2F ギャラリー 6 月 15 日～16 日：23:00～7:30 (オールナイト・イベント：共同夢体験)
閉廊日	2024 年 5 月 20 日(月)、27 日(月)、6 月 1 日(土)、2 日(日)、3 日(月)、10 日(月)
入場料	無料
アーティスト	足立正生、nadir B. + 三浦 一壮、Cabaret Courant faible (弱流キャバレー)、バディ・ダルル、遠藤 薫、FanXoa、ジャン＝バティスト・ファーカス、太湯雅晴、ユニ・ホン・シャープ、石川雷太、城之内元晴、キュンチョメ、三宅砂織、Onirisme Collectif、ミグリン・パルマヌ、嶋田美子

運営	ゲバルト団体
キュレーション	アレクサンドル・タルバ
コーディネーション	平居香子、アントワーヌ・ハルプク
メディエーション	宮内芽依
グラフィックデザイン	中島りか
協力	東京日仏学院、CAVE-AYUMI GALLERY
特別協力	IeRum Santa Maria、IKHÉA©SERVICES & Glitch、東大立て看同好会
ウェブサイト	https://gewaltdantai.com/ja/
助成	公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 公益財団法人 野村財団 公益財団法人朝日新聞文化財団

イベント

5 月 25 日〜6 月 9 日　　ジャン＝バティスト・ファーカス、『従う』- 収集段階

「ゲバルト」展のために、匿名で、怒りや不快感を覚えた服従の行為、または、今も後悔している屈服の経験について、数行お書きください。自己検閲することなく、自由に記述してください。そして、その文章を以下の住所に送ってください。「ゲバルト」展に展示されることで、あなたの言葉は、人々がしばしば傷つけられることを知りながら継続している、服従のさまざまな形式について、意識を高めるでしょう。文書は展覧会終了後に破棄されます。

送付先：〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町 15 東京日仏学院　芸術部門　ゲバルト展係

東京日仏学院

5 月 18 日(土) 16:00　　オープニング

5 月 18 日(土) 18:00　　ミグリン・パルマヌによるパフォーマンス：『Anfleuri ankor (また咲いた)』

5 月 25 日(土) 10:45〜21:30　第 10 回「哲学の夕べ」―暴力について：下記のプログラムを実施予定：「ゲバルト」展ガイドツアー、ユニ・ホン・シャープによる『ENCORE – Mer』上映、國分功一郎による講演、エルザ・ドルラン (Elsa Dorlin)による講演、吉田喜重監督『エロス＋虐殺』上映（マチュー・カペル (Mathieu Capel)によるプレトークあり）。詳細は東京日仏学院のウェブサイト（https://culture.institutfrancais.jp/event/nuit-de-la-philo-2024)をご覧ください。

6 月 15 日(土) 17:00〜18:00	ジャン＝バティスト・ファーカス：『従う』- 破壊段階
6 月 15 日(土) 19:00〜19:40	Erehwon：『Now here ≠ Erehwon』、ノイズ・パフォーマンス、石川雷太（メタルパーカッション、エレクトロニクス、映像）ほか
6 月 15 日(土) 20:00〜20:30	nadir B. + 三浦 一壮：『Flatness』（オーディオビジュアル・パフォーマンス）

セッションハウス 2F ギャラリー

6 月 15 日：23:00〜翌 7:30　　『Onirisme Collectif # 10 -Gewalt-』、オールナイト・イベントの共同夢体験、パフォーマー：Ad Mornings、岡本羽衣×fantome experiments、今宿未悠、山口 ジュン、遠藤 薫ほか。

詳細はこちら：https://cargocollective.com/onirismecollectif/

「ゲバルト：制度の暴力に対する抵抗の変遷」

« Gewalt : Devenir des résistances à la violence institutionnelle »

この展覧会は、制度の暴力の中で特定の芸術形態がどのように発展していくかを示そうとするものである。それは、同時に、社会活動、反乱、現代の革命的な闘争における芸術の役割を問う。

「ゲバルト」とはドイツ語で「暴力」を意味する。1960 年代、日本の国家と警察の暴力に直面した新左翼は、「ゲバルト」という言葉をつかみとった。彼らの語法によれば、「暴力」は体制側による暴力、言い換えれば国家の目的に奉仕する暴力を意味し、逆に「ゲバルト」はその反動、つまり「反暴力」を意味した。反暴力は、法維持的暴力に対するすべての抵抗の副産物として、反乱の手段と正当性についての考察と切り離すことはできない。ヴァルター・ベンヤミンの暴力批判に沿うものであり、 1928 年 5 月 1 日に『Le Réveil anarchiste (アナーキストの覚醒)』にあらわれたエリコ・マラテスタの言葉も想起させる。彼は、奴隷は常に正当防衛の状態にあり、「主人や抑圧者に対する反乱は、常に道徳的に正当化される」と説明したのだった。

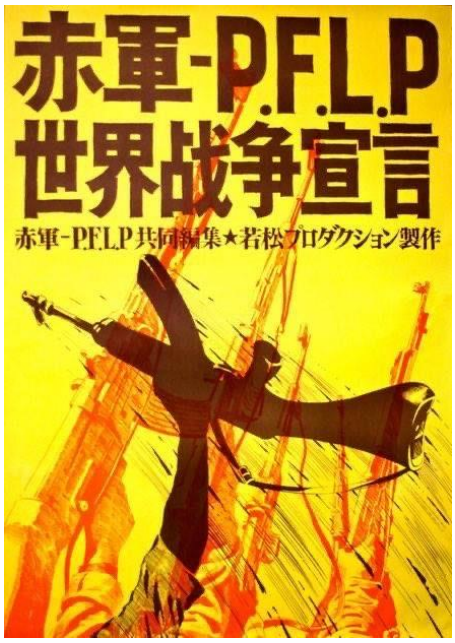
「ゲバルト」展で展示される作品は、反乱のメタファーや積極的参画実践に基づいている。国家の暴力、資本主義の制度的抑圧、あるいは制度的権威主義（プロパガンダ、検閲、監視）に直面したこれらの作品は、様々な反暴力的反応とその美的様式を反映するものだ。

この展覧会は、制度の暴力に対するこうした様々な抵抗の形を視野に入れている。見出される芸術のパフォーマティヴィティや、直接行動で社会に変化をもたらす可能性についての政治的な問いは、歴史的なアプローチに基づいている。

加えて、ゲリラの経験に付随する芸術形態と、抵抗の触媒として機能する活動との対決は、反暴力と非暴力の接点において、政治的行動の様式と呼応しながら、闘争的な芸術表現の様々な様式を検証する。

ゲバルト
団体

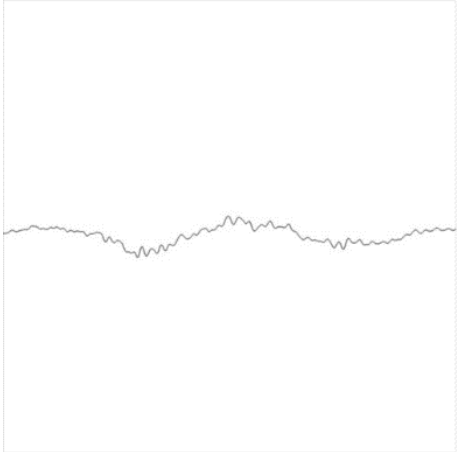
東京日仏学院への出品作家



若松プロジュション（足立正生・若松孝二）、『赤軍-P.F.L.P 世界戦争宣言』、1971 年
ポスター：赤瀬川原平

足立正生　｜　Adachi Masao
出展作品：若松プロダクション（足立正生・若松孝二）『赤軍-P.F.L.P 世界戦争宣言』、映像作品、16mm からデジタル変換、1971 年

1939年生まれ。日本大学芸術学部新映画研究会で自主制作した『鎖陰』で注目される。大学中退後、若松孝二の独立プロダクションに加わり、性と革命を主題にした前衛的なピンク映画の脚本を量産し、監督としても1966年『堕胎』で商業デビュー。
1971年にカンヌ国際映画祭の帰路、レバノンへ渡り、パレスチナゲリラの日常を描いた『赤軍－PFLP・世界戦争宣言』を製作したのち、1974年日本赤軍に合流、国際指名手配される。1997年レバノンで逮捕され、３年間ルミエ刑務所に抑留。2000年２月刑期満了、日本へ強制送還された。
2007年、日本赤軍の同志だった岡本公三をモデルに『幽閉者テロリスト』で35年ぶりにメガホンを取り、日本での創作活動を再開。最新作は、２０２２年に起こった衝撃－安倍元首相の銃撃事件を素材にした『REVOLUTION+1』。



nadir B.、『Flatness』、ミニアチュール、2024 年

nadir B.　｜　ナディール・ベ
出展作品：『Flatness』、電気音響インスタレーション、2024年

パフォーミング・アーツにおける、音響と音楽を探求する、アーティスト／リサーチャー。ギュスターヴ・エッフェル大学（パリ）で音楽創作とサウンドアートを、パリ第7大学で19世紀アメリカ文学を学ぶ。2005年、Nadine（ブリュッセル、現代アートセンター、レジデンス施設）と協働。最新の技術と、パフォーミング・アーツとの関係を探求した。フランソワ・ベールとともに電子音響音楽の作曲に取り組んでいた。2008年から2010年にかけて、IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）に在籍し、音楽情報学にも詳しい。ベルギーとフランスで企画されている学際的な芸術プロジェクトに参加中。https://nadirbabouri.fr

三浦 一壮、『美しき老体 2024』、プレ公演、2024 年、写真：高島史於

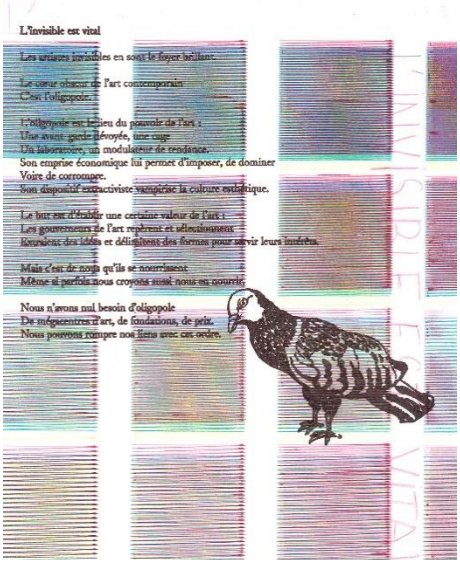
三浦 一壮　｜　Miura Issō

出演 : nadir B. + 三浦 一壮、『Flatness』、オーディオビジュアル・パフォーマンス、2024年

2024年6月15日20:00

1937年5月24日北朝鮮平城生まれ。及川広信、大野一雄、安堂信也に師事。1965年「傾斜の存在」で初舞台。1989年活動休止、2018年再活動。

主な海外での活動に1975年Nancy演劇祭、1977年Nancy演劇祭を「Butohsha」 として参加。舞踏グループとしてヨーロッパで初披露。1974年インターナショナルワークショップ　フェスティバル(イタリア・ベルガモ)。以降フランス、ポーランドを中心にヨーロッパ各地を巡る。2018年ラテンアメリカペルーのアクーチョ　ミーティングに参加。2020年アヤクーチョ　リマ　ミーティングに参加。2022年ケルン、パリ、セビリアにて活動。国内では2023年「バラ色ダンス」京都、沖縄公演。2023年ドイツ文化研究所にて公演。



キャバレー・クラン・フェブル、『我々の存在の条件 弱流宣言』、印刷テスト

Cabaret Courant faible　｜　キャバレー・クラン・フェブル(弱流キャバレー)

出展作品 : 『我々の存在の条件 弱流宣言』、レコード、蛇腹折パンフレット(デジタルプロッタ)、2024年

キャバレー・クラン・フェブル が誕生する100年前、チューリッヒではキャバレー・ヴォルテールが開催されていた。その手柄の後、キャバレー・ヴォルテールの創設者が山奥に引っ込んでしまった。キャバレー・クラン・フェブルのメンバーはパリの東に住み、芸術の城塞の周辺に活動している。彼らは宴会を主催し、テントの下で演じたり、無許可テレビに出演し、農場で契約したり、反履歴書を書き、宣言を煽る。

バディ・ダルル、『King of the System』、詳細、2019 年、写真：François Lauginie

バディ・ダルル　｜　Bady Dalloul

出展作品：『King of the System』、インク染めの骨と古いボードゲームからなるコラージュ作品、26x30x5 cm、2019年

バディ・ダルル (1986年パリ生まれ) はフランスのマルチメディアアーティストで、歴史的な 出来事、個人的な事実、そしてフィクションを絡めた作品を制作している。彼の作品には、自身の遺産と世界的な移民問題についての社会学的、歴史的考察が込められている。ダルルは、領土の境界線について考察しながら、西洋を中心とした歴史学と知識の生産のあり方に疑問を投げかける。ドローイング、ビデオ、オブジェを通して、ダルルは、想像と現実の間の対話を促し、歴史記述の論理を問う。

2017年にアラブ世界研究所(Institut du Monde Arabe) から「アラブ現代創作のためのアラブ世界研究所友の会賞」を受賞し、アラブ近代美術館(Arab Museum of Modern Art Mathaf Qatar) で個展を開催した。

遠藤薫、『火炎瓶/ 沖縄/ 1945』、詳細、2020年製作

遠藤 薫　｜　Endō Kaori

出展作品：『火炎瓶/ 沖縄/ 1945』、材料・沖縄のコーラ廃瓶、（1945-2022年製）、泡盛の廃瓶、首里城の灰、辺野古と嘉手納基地の赤土、黒糖、珊瑚、貝殻など。米軍基地払い下げパラシュート紐。1945年製のコーラ瓶、沖縄の砂浜の砂。製作工程動画、2024年

1989年生まれ。2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ主宰アルスシムラ卒業。沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある社会的、政治的な関係性を紐解き、主に工芸技法を用い、工芸の拡張を試みる。

近年の主な展覧会に、「国際芸術祭あいち2022」(2022、一ノ宮市豊島記念資料館）、「Osaka Directory3 遠藤薫『重力と虹霓ー南波照間島について』」（2023、大阪中之島美術館）、「美術の中のかたちー手で見る造形　遠藤薫『眼と球』」（2023、兵庫県立美術館）がある。

https://www.kaori-endo.com/

FanXoa、『ゾザン、コバネの戦士』、詳細、2019 年

FanXoa

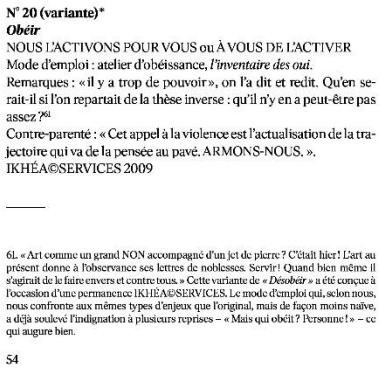
出展作品：『国家に対するペトラ』ドイツ赤軍(RAF)のペトラ・シェルム (Petra Schelm)の絵 +『ラモーナ、チアパスの司令官』サパティスタ民族解放軍(EZLN)のラモーナ司令官(Commandante Ramona)の絵 +『ゾザン、コバニの戦士』クルド人民防衛隊(YPG)のゾザン・ジュディ(Zozan Cûdî)の絵、「24人のエレクトリック・ヒロイン」のシリーズより一部抜粋、アクリル絵具、コラージュ、2019年

FanXoa は 1983 年以来、吠え猿のサウンド・パフォーマンスから絵画的瞑想に至るまで、複数の芸術分野にまたがって活動している。1984 年のオーウェル時代にパリの国立高等美術学校を脱走し、図像的夢を追い求める無駄な時間を過ごす。ファナート・パンク、新しい図像的表象、禅的表現主義、さらにはアクショニズムや行動主義的なコラージュを実験。顔、視線、態度、肉体の表現、魂の狂気、反乱や戦争の表現に興味を持ち、この苦悩に満ちた世界の現実からインスピレーションを得る。

https://fanxoa.archivesdelazonemondiale.fr/

ジャン＝バティスト・ファーカス　|　Jean-Baptiste Farkas

出展作品：『従う』、使用説明書、2009年



N° 20 (variante)*
Obéir
NOUS L'ACTIVONS POUR VOUS ou À VOUS DE L'ACTIVER
Mode d'emploi : atelier d'obéissance, *l'inventaire des oui*.
Remarques : « il y a trop de pouvoir », on l'a dit et redit. Qu'en serait-il si l'on repartait de la thèse inverse : qu'il n'y en a peut-être pas assez ?[6]
Contre-parenté : « Cet appel à la violence est l'actualisation de la trajectoire qui va de la pensée au pavé. ARMONS-NOUS. ».
IKHÉA©SERVICES 2009

6L « Art comme un grand NON accompagné d'un jet de pierre ? C'était hier ! L'art au présent donne à l'observance ses lettres de noblesses. Servir ! Quand bien même il s'agirait de le faire envers et contre tous. » Cette variante de « *Désobéir* » a été conçue à l'occasion d'une permanence IKHÉA©SERVICES. Le mode d'emploi qui, selon nous, nous confronte aux mêmes types d'enjeux que l'original, mais de façon moins naïve, a déjà soulevé l'indignation à plusieurs reprises – « Mais qui obéit ? Personne ! » – ce qui augure bien.

54

ジャン＝バティスト・ファーカス、『従う』, 『Des modes d'emploi et des passages à l'acte』(使用説明書と行動)からの発言, 54 頁

ジャン＝バティスト・ファーカス（別名IKHÉA©SERVICES、Glitch, Beaucoup plus de moins!)は、自らをサービスプロバイダのアーティストと定義する。彼は、様々な見出し語の一覧として整理された「使用説明書」を考案した。それらは、現実世界での直接行動を生み出すために、妨害、公共物の破壊行為　、流用と密接に結びついている。『従う』は『Des modes d'emploi et des passages à l'acte』(使用説明書と行動)からの抜粋である。下記リンクより無料でダウンロード可能 (フランス語)：

https://riot-editions.fr/ouvrage/dmd-dpal/

太湯雅晴、『立て看 パビリオン』、2024 年

太湯雅晴　｜　Futoyu Masaharu

出展作品：『立て看 パビリオン』、インスタレーション、立て看板、木材、他、2024年

1974 年生まれ、日本人。公共性と創造的行為の関係をテーマに活動を行う。 2023 年 六本木アートナイト 2023（六本木、東京）、2021 年 東京ビエンナーレ 2020/2021（数寄屋橋公園内、東京）、2021 年 バーチャルの具体性（花園アレイ THE 5TH FLOOR、東京)、2017 年 さっぽろアートステージ 2017（地下歩行空間、札幌）、2014 年／2012 年／2008 年 黄金町バザール（黄金町、横浜）、2012 年 2:46 and thereafter（Washington, D.C.）、2012 年 紙・非紙 中日紙芸術展第一回（中央美術学院美術館、北京）、2007 年 LOCKER GALLERY at TOKYO NATIONAL MUSEUM（東京国立博物館、東京）等の展覧会に参加。https://futoyu.com/

石川雷太、『GEWALT』、ガラス、言葉、塗料、木、2002 年

石川雷太　｜　Ishikawa Raita

出展作品：『GEWALT』2002制作、『GEWALT』（GAZA バージョン、UKRAINE バージョン）エスキース、2024年制作

1965年、茨城県に生まれる。鉄、ガラス、言葉、骨、放射性物質、武器、TVニュースの画像、ノイズ音など、多種多様な引用と組み合わせ(サンプリング＆ミックス)により、物質と人、自然や戦争の問題まで、様々な角度から〈世界〉を映し出す。1997年よりノイズ・パフォーマン・スユニット「Erehwon」を主宰。2008年より密教系芸術集団「混沌の首」を共同主宰。2012年より反原発・反放射能アートグループ「イノチコア」に参画。3.11以後は、放射性廃棄物ドラム缶を日本中に運びパフォーマンスを行う。展示は、森美術館、府中市美術館、イスラエル美術館、原爆の図丸木美術館、日本アンデパンダン展、BIWAKOビエンナーレ、大地の芸術祭・ギャラリー湯山、多摩美術大学、東京大学駒場学生寮、他。http://erehwon.jpn.org/raita_ishikawa

「Erehwon」によるパフォーマンス

Erehwon：『Now here ≠ Erehwon』、ノイズ・パフォーマンス、石川雷太（メタルパーカッション、エレクトロニクス、映像）、ほか。2024 年 6 月 15 日 19:00

美術家、石川雷太が主宰するノイズ・ユニット。1997 年より活動。鉄板や工業用スプリング、ドラム缶などの金属廃材の打撃音・摩擦音のライブ・ミックスによる演奏を行う。多義的なテキストによるメッセージと、明滅する映像によるノイズ・パフォーマンス。機械文明の「光」と「影」が映し込まれたそのサウンドは、現代に生きる我々にとって最もリアルで最も基礎的な、潜在的な BGM だといえる。

城之内元晴、『ゲバルトピア予告』、抜粋、1969 年

城之内元晴　｜　Jōnouchi Motoharu

出展作品：『ゲバルトピア予告』、映像作品、13分、16mmからデジタル変換、1969年 ©城之内美稲子

1935年茨城県生まれ、1986年死去。映画監督。1957年、平野克己、康浩郎、神原寛らと日本大学芸術学部映画研究会（日大映研）に参加し、《Nの記録》（1959）、《プープー》（1960）の演出を手掛ける。1961年にジャンルを越えた表現者たちの交流拠点として、神原、浅沼直也、足立正生らと〈VAN映画科学研究所〉を立ち上げる。小杉武久、赤瀬川原平、風倉匠ら前衛芸術家と共同した《ドキュメント6・15》（1961）、《シェルタープラン》（1964）、《WOLS》（1964-69）、全共闘運動を記録したゲバルトピアシリーズとして、《日大大衆団交》（1968）、《ゲバルトピア予告》（1969）、《新宿ステーション》（1968-1974）などの作品を送り出す。1970年以降は神奈川映画ニュース映画協会および東京都映画協会にて数多くのニュース映画を手がけた。

三宅砂織、『Seascape (Suzu)2』、抜粋、2024 年

三宅砂織、『The missing shade 60-1』、26x35 cm、 2024 年

三宅砂織　｜　Miyake Saori

出展作品：『Seascape (Suzu)2』、シングルチャンネルビデオ、11 分、2024 年 +『The missing shade 60-1』の作品サイズ、26x35 cm、 2024 年

近年の仕事として、個展「Nowhere in Blue」（WAITINGROOM、東京、2023)、「アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.9 三宅砂織」（岐阜県美術館アトリエ、岐阜、2021）、「THE MISSING SHADE 3」(WAITINGROOM、東京、2019)、グループ展「アーバン山水 β」（kudan house、東京、2023)「ミラーレス・ミラー」（gallery αM、東京、2022）、「The Practice of Everyday Practice 日常の実践の練習 –」（名古屋芸術大学 Art & Design Center、愛知、2021）、「奥能登国際芸術祭 2020 +」（スズ・シアター・ミュージアム、石川、2021）、「MOT アニュアル 2019 Echo after Echo: 仮の声、新しい影」（東京都現代美術館、東京、2019）、「第 20 回 DOMANI・明日展」(国立新美術館、東京、2018)、「ArtMeets04 田幡浩一/三宅砂織」(アーツ前橋、群馬、2017)、そのほか、2010 年 VOCA 賞受賞、平成 27 年新進芸術家海外研修制度研修員、2016 年京都府文化賞奨励賞受賞など。https://saorimiyake.com/

ミグリン・パルマヌ、『記憶を脱結晶化すること』の 1 枚、2024 年

ミグリン・パルマヌ　｜　Migline Paroumanou
出展作品：『記憶を脱結晶化すること』1、三枚写真、50x70 cm、アルミマウント、2024年5月

ミグリン・パルマヌは物質主義や消費者主義に汚染され、世俗化・グローバル化が極度に進行した世界への幻滅に抵抗するアーティストの一人で、彼岸の世界やはかなく移ろうもの、聖なるものとの特別な関係を維持している。彼女の芸術は、信仰が破壊された風景の中で生み出され、それが新しい形の発明に貢献し続けている。直感的であると同時に象徴的な彼女の身振りは、儀式的な秩序を感じさせる。陶器や磁器で彫刻された彼女の作品は、滅びゆく有限の存在である私たちの境遇を生き抜くかのような精神性に満ちている。彼女の実践は現象学的である。つまり、生きた経験から情報を得ていると同時に、目に見えないものを現す現象に形を与えようとしているのだ。彼女の制作は、東洋哲学やヒンドゥー哲学の影響を受けており、作品に現れる様々な人物や集団は、ひとつの神的で究極的な彼方の別種の顕現である。
https://www.miglineparoumanou.com/

ミグリン・パルマヌ、『Anfleuri ankor (また咲いた)』、パフォーマンス。2024年5月18日18:00
植民地主義の砂糖で汚れた体をどうやって清めるのか？祖国からの分離に蝕まれた人々の魂を浄化するにはどうすればいいのか？何世代にもわたる砂糖の労働者を癒すために、どのように体と魂を浄化するのか？

パフォーマンスの材料(バガスというサトウキビ搾汁後の残渣)を提供してくださった IeRum Santa Mariaに感謝申し上げます。

嶋田美子、『中ピ連を招魂する（海）』、
写真、120x180 cm、2023 年

嶋田美子　｜　Shimada Yoshiko

出展作品：『ピンク・モロトフ・カクテル』、ビン、燃えた布、紐、手描きラベル、色水、2023年

アーティスト、美術史研究者。1959 年東京生。1982 年米国スクリップス大学卒。2015 年、英国キングストン大学より博士号（美術史）取得。作品テーマは第二次世界大戦の文化的記憶と第二次世界大戦中での加害者・被害者としての女性の役割。表現方法は版画、ビデオ、パフォーマンス、リサーチ、アーカイブなど多岐にわたる。また美術史家、アーキビストとしても活動しており、研究対象は戦後日本の政治と芸術、オルタナティブ美術教育、フェミニズムなど。作品は、２０１９年あいちトリエンナーレ「表現の不自由展、その後」、MQ ウィーン「Japan Unlimited」展、２０１５年テルアビブでの「Beyond Hiroshima」展はじめ、国内外で展示されている。２０１７年より２４年まで東京大学教養学部非常勤講師として戦後日本の美術、政治、フェミニズムについて講義、その内容を２０２３年単著「おまえが決めるな！」として出版。現在千葉県鴨川市在住。

CAVE-AYUMI GALLERY への出品作家

CAVE - AYUMI GALLERY で開催される「ゲバルト」展の一部は、制度の暴力に対する抵抗の形として、反暴力と非暴力の差異に焦点を当てる。また、日本の植民地主義の記憶を、様々な美学的な手法、特に反復とルポルタージュの使用を通して検証する。https://caveayumigallery.tokyo/

ユニ・ホン・シャープ、『Répète｜リピート』、写真｜Art Award IN THE CUBE 2020

ENCORE - Mer の映像キャプチャ、映像撮影｜飯岡幸子

ユニ・ホン・シャープ ｜ Yuni Hong Charpe
出展作品：『Répète｜リピート』、映像、8分、2020年

アーティスト。東京の在日コリアンコミュニティ出身。2005年に渡仏、2015 年にパリ＝セルジー国立高等芸術学院を卒業し、現在はフランスと日本を拠点に活動。
アーカイブや個人的な記憶から出発し、構築されたアイデンティティの不安定さと多重性、記憶の持続をめぐり、新しい語り方を探りながら、身体／言語／声／振付を通じてその具現化を試みる。最近の作品に、パフォーマンス『ENCORE-Mer』(2022)、映像インスタレーション『RÉPÈTE』(2020)など。2023年度アジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）、アーツコミッション・ヨコハマ（ACY）フェロー。
https://www.yunihong.net/

ユニ・ホン・シャープ、『ENCORE - Mer｜アンコール - 海』映像、17分、2023年。2024年5月25日：東京日仏学院の「哲学の夕べ」で上映

キュンチョメ、『トラを食べたハト』、抜粋、2018-2020 年

キュンチョメ ｜ Kyun-Chome
出展作品：『トラを食べたハト』、映像、37 分、2018-2020 年

ホンマエリとナブチのアートユニット。
制作行為を「新しい祈り」と捉え、この世界と出会い直すための詩的でユーモラスな作品を制作している。
近年の主な展覧会に「六本木クロッシング 2022：往来オーライ！」(森美術館 東京）、「現在地：未来の地図を描くために［1］」(金沢 21 世紀美術館 2019）、「あいちトリエンナーレ 2019」(愛知）などがある。
https://www.kyunchome.com/

セッションハウス 2F ギャラリーへの出品作家

Onirisme Collectif # 9、2023 年、コーパヴォグル美術館、アイスランド（Curro Rodriguez のパフォーマンス）

Onirisme Collectif／花岡美緒　｜　Hanaoka Mio

出展作品：『Onirisme Collectif # 10 -Gewalt-』、オールナイト・イベント：共同夢体験、パフォーマー：Ad Mornings、岡本羽衣×fantome experiments、今宿未悠、山口 淳、遠藤薫ほか。詳細はこちら：
https://cargocollective.com/onirismecollectif/

Onirisme Collectif は 2016 年から行なっている、90 分に一度 15〜20 分程度くると言われているレム睡眠の時間にパフォーマンスをすることで観客の無意識に介入し、共同夢を促すことを目的としたプロジェクトである。 個人的体験だと思われている夢の体験を、このプロジェクトを通じて共同体験に押し上げることを目指している。Onirisme Collectif#10 は身体的で深いレベルで、共同夢を無意識で体験する開かれた機会を通じて、個人性を解体し、反暴力の展望を示唆する。

運営

ゲバルト団体　｜　Gewalt Dantai

アレクサンドル・タルバ、平居香子、宮内芽依、

アントワーヌ・ハルプク、ガーリン

https://gewaltdantai.com/ja/

「暴力の問題、さらにはテロリズムの問題は、前世紀以来、帝国主義の暴力に対する反応として、様々な形式で、革命運動や労働者運動を煽動し続けた。」

ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリ

『Le pire moyen de faire Europe（ヨーロッパをつくる最悪の方法）』、1977 年

ゲバルト団体は、2023 年 5 月に東京で設立された芸術的・政治的団体である。

団体の名前は、1960 年代の日本における、ドイツ語の「Gewalt」の解釈に由来する。この文脈では、「ゲバルト」は、「暴力」と呼ばれる制度への反動、つまり、「反暴力」を意味する語である。キュレーション集団として構想されたゲバルト団体は、積極的参画の芸術実践や革命運動の歴史、アクション・行動・行為、ゲリラ、儀式、暴動、デモ、市民的不服従、共同体などの反乱の現代的な様式を研究するためのプラットフォームでもある。

ゲバルト団体は、プロレタリアの伝統を受け継ぎ、世界中の被抑圧者と連帯し、市場の論理に対抗して、反資本主義的な現代アートのビジョンを擁護する。

そして我々は、直接行動としての美学を、象徴的な武器としての芸術を、要求する。

キュレーション

アレクサンドル・タルバ　｜　Alexandre Taalba

カビール系のフランス人・アルジェリア人の研究者・キュレーター。パリ第 8 大学にて博士号(美学)を取得、東京大学総合文化研究科超域文化専攻表象文化論研究室の客員研究員である。博士論文のタイトルは「虚の記憶のイメージ：日本における原子力時代の技術批判の美学について」。資本世（キャピタロセン）への問いかけを通して、戦後美術・現代アートにおける原爆の表象と経済・技術的合理性の批判、及び被爆者の記憶と反核ラディカリズムの関係性について考察している。ジル・ドゥルーズ、ギュンター・アンダース、シモーヌ・ヴェイユなどに影響を受け、バーチャルという概念、無政府主義の哲学、革命運動の歴史についても研究対象としている。

連絡先：　alexandre.taalba@gewaltdantai.com

You won't find me on Facebook